

実践的適用（釈義と説教）

新約聖書における旧約聖書の引用の問題をめぐって

（詩篇第二篇と使徒行伝四・二四—三〇）

石丸 新

一 テキストの文脈と構成

与えられたテキスト——使徒行伝第四章二四—三〇節——は、通常「使徒的祈願」と呼ばれる、原始キリスト教会の教会としての祈りである。これが、教会の一致した祈りであり、共通の告白に基づいたものであることは、「口をそろえて（ホモスマドン）」声をあげて言ったと叙述されるところから明白である。ホモスマドンは、新改訳聖書が訳出するように、「心を一つにして」の行為であることを強調し、聖霊が使徒たちおよび信徒たちの間に造り出す一致を描き出している。

この一致は、礼拝における一致という一般的な意味で捉えられるべきではない。この箇所では、特に、福音の宣教と擁護のための一致に力点が置かれている。ルカは、福音書Ⅱ行伝を通じて、群れの祈りを重んじて記すが、ここでは特に、福音の宣教を禁止したユダヤ教体制派に対して敢然と立ち向かうキリストの群れの一致した姿が描き出さ

れ、敵の一致と教会の一致の対比が浮き彫りにされている。

この祈りを前と後から挟むように枠づけしているのが、祈りが導き出された状況を記す二三節と、祈りが聴かれた結果、惹き起こされた状況を述べる三一節である。ペテロとヨハネは、ゆるされて、仲間たち、すなわち、使徒団のもとに帰り、いっさいのことを報告したが、その報告内容は、ユダヤ教最高議会がふたりにかけた「おどし」に集約されていた。彼らは、たしかに、ゆるされはしたが、それは、このおどしをかけられた上での身柄釈放であった。教会は、この公けのおどしに立ち向かう。議会は、おどしをかけることを当面の最上の方策として決定し（一七節）、イエスの名によって語ってはならないと公けに言いわたす（一八節）。これに公然と抵抗を示したペテロとヨハネに対し、体制側は「更におどしたうえ」ふたりをゆるす（二二節）。一七節のアペイレオーは、二二節のプロスアペイレオーにおいて、その程度が高められ、さらに、この「おどし」は次の段階では、使徒たちへの「むち打ち」の刑となる（五・四〇）。このつながりから見れば、おどしは、たんなる言葉の上でのこわがらせではなく、ユダヤの法律に従った「警告」であって、刑の判決の前段階をなす公けのことからである。祈りの中に見える「脅迫」の語（二九節）も、当時の法律用語であると指摘されている。

このような、公然たる宣教禁止令に正面から立ち向かう使徒団は、教会の中心的な使命である福音の説教のわざを大胆に進めることができるように祈り、この説教を堅くする奇跡を行い得るように求める。この祈りはただちに聴かれ、一同は聖霊に満たされて神の言を語り出すことをゆるされる（三一節）。聖霊の満たしと福音の宣教とは、ペンテコステの場合と同じく、ここでも直結されている。祈っているところに聖霊の臨在が示されたことも、ペンテコステの記事に類似している。

あろう。ブルースが、この区分に「奇跡とその結果」という表題をつけているように、ペテロとヨハネとが足の不自由な男をいやした奇跡は、一方においては、民衆の間に驚きを惹き起こし（三・一〇、一一、一二）、その驚きを解く形で、神の約束の成就としてのキリストの受難と死と復活を内容とする。ペテロの説教が語られる（三・一三以下）。これを聞いて信じた者は、男だけで五千人にのぼった（四・四）。他方、ユダヤ人指導者の間には、まず、「いら立ち」が見られ（四・三）、次いで、「不思議」の念が生じ（四・一三）、いやしの奇跡が事実であることの認識がなされる（四・一四）。しかし、その認識は信仰には到らず、反対に、おどしをもって福音宣教を禁止することとなる（四・一七、一八、二一）。これが、行伝に記録されている最初の衝突の記事である。

先にも述べたように、このテキストが浮かび上がらせようとする教会の一致は、抵抗における一致であり、究極的には、み言葉を大胆に語ることににおける一致である。権力によって圧迫され、み言葉を語ることを禁じられるという、このさし迫った状況の中で、まさにそのような状況のただ中から、神への信仰は告白され、神に対する求めが祈りとなってはしり出る。二四節の「一同はこれを聞くと」の後に、西方本文が、「神の力を認めて」の句を挿入し、「口をそろえて、神にむかい声をあげて言った」と続けていることは、この箇所を理解にとって大きな助けとなる。脅威と苦悩の中にあつて、教会は、神の力により頼むことを忘れはしなかったし、イエスの名の力を疑うこともなかった（四・三〇、参照四・一二）。この確信のあるところ、「神の言はつながれてはいない」（第二テモテ二・九）。一致の観点からテキストを見直すと、次の点が明らかとなる。「仲間の者たち」（二三節）、すなわち、使徒団は、復活のイエスによってガリラヤで再編成され、福音宣教の使命を与えられ（マタイ二八・一六～二〇）、ペンテコステの朝、聖霊の満たしを受けて、世に向かって語り出す者とされた群れである（行伝二・四）。キリストにおける一致、聖霊による一致は、とうぜん使命における一致を要請する。現実の世にあつてこの使命を果たす教会は、キリス

トの苦難にあずかることにおいてひとつとされ、ひとつとして立てられた群れである。テキストの描き出す、ひとつとなつて神を賛美し、神に祈る教会は、メシヤの民として、メシヤの受けた脅迫と苦難にひとつとなつてあずかる教会にはかならない。この一致は、さらに、信者の生活上の一致として具現されることとなる（四・三二以下）。

二 詩篇第二篇引用のねらい

メシヤとメシヤの民の関係を、メシヤの受難とメシヤの民の受難の類比において捉えることは、ルカ福音書においてすでに見えているところである。ルカの記すイエスの受難予告記事では（ルカ九・二二～二七）、人の子の受難と復活の予告（二二節）に直結する形でイエスに従う者の受けるべき苦難、すなわち、十字架の道が記され（二三～二七節）、分量からしても、メシヤの民の受難への力のかけかたが著しい。ルカにおいては、苦難のメシヤは、メシヤ共同体の受ける苦難を意味している。マルコおよびマタイが、イエスの受難予告とイエスに従う者の受難記事の間に、ペテロがイエスをいさめたという事件をエピソードとして挿入するのに対して、ルカは、このエピソードを外し、しかも、マルコ、マタイの場合のように新しい段落を設けることをせず、ひと続きの流れと勢いの中で、メシヤの民の苦難を記している。

原始教会の群れがユダヤ当局者の警告を受けて福音宣教のわざを禁止された時、教会はこの苦難をメシヤの民の受けるべき苦難として受けとめたに違いない。すくなくとも、ルカの取り扱いでは、そうである。教会の祈りの中に引用されている詩篇二・一～二は、明らかにメシヤの受難を預言するものと、教会によって解釈され、預言の成就としてのイエスの出来事が、対応の関係で説明される（二七～二八節）。この場合、引用のねらいは、メシヤへの「逆ら

い」のモチーフをきわ立たせることにあると見てよいであろう。異邦人・民・王・支配者がひとつとなつての、主とそのキリストへの逆らいが、ヘロデ・ピラト・異邦人・イスラエルの民によるイエスへの逆らいと対応の関係におかれ、預言とその成就の筋が明白にあらわされている（二六、二七節）。この逆反は、歴史のすべてを支配される神のみ旨を、じつは成就することであつたと説明され、告白される（二八節）。詩篇第二篇の引用とイエスにおける成就を告白する部分は、段落の切れ目なしに、直ちに、いまの時における教会に対する脅迫を語る部分へと、流れ込むように続いて行く（二九節）。

むかし預言されていたメシヤへの逆反は、すでに、聖なる僕イエスに対する逆らいにおいて成就したのみならず、いまメシヤの民が脅迫を受けることにおいて、二重の成就を見ている、と使徒団は理解し、告白していると考えられることができる。先に述べたように、われわれのテキストの文脈では、教会に対する「おどし」のモチーフが一貫して明白である（一七、二二節では動詞が、二九節では名詞が用いられる）。この「おどし」のモチーフと「逆らい」のモチーフが、複合された形であられるのが、このテキストである。次第にエスカレートして行く「おどし」にもかかわらず、「人間に従うよりは、神に従うべきである」（五・二九、参照四・一九）との確固とした信仰の勇氣に従って、教会は命の言葉、救いの福音を語り、これを教えるわざに進んで行く。この宣教は、いやしの奇跡と結ばれて、主を信じる者を数多く起こすこととなったが、特に、み言葉を語るわざについてルカの記述するところから、次の特質を挙げることができる。第一に、大胆さ（四・三一）、第二にメッセージの広さ（五・二〇、参照二〇・二〇、二七）、第三に、対象の広さ（五・二八）、そして第四に、継続性（五・四二）である。これらの特質に共通する徹底性は、ユダヤ教最高議会の凶る圧迫の徹底性に対応するのみならず、これをはるかに超えている。体制側の態度は、使徒たちへの嫉妬の念（五・一七）、使徒たちの捕縛・留置（五・一八）、尋問（五・二八）、激しい怒り（五・三三）へと昇

って行くが、律法学者ガマリエルの仲裁により、むち打ちの刑の執行（五・四〇）に落ち着き、釈放へと到る（同）。使徒たちの受けた苦難は、「御名のために恥を加えられるに足る者とされた」喜びに変えられ（五・四一）、宣教禁止の言いわたしにもかかわらず、毎日の宣教が広範に推進されて行くこととなる（五・四二）。

ここまでを見さだめるならば、われわれのテキストとの関係において次のことが言える。すなわち、主イエス・キリストの教会は、メシヤが定められた逆らいを受けたように、メシヤの民としての逆らいを受ける。それは定められた苦難である。にもかかわらず、教会は聖霊に満たされて力を受け、逆らいと脅迫の状況の中で、全能の神の力への信頼と、神のみ旨への従順に生き、力強く、主イエスの復活のあかしを展開して行く。メシヤの苦難の定めは、メシヤの民の苦難の定めであること、また、神のみ手によるメシヤの復活は、メシヤの民の勝利の保証であること、このふたつのポイントがわれわれのテキストでは鮮明である。詩篇第二篇は、このことを浮かび上がらせる意図のもとに引用され、そのような意味において、教会によって解釈されている。

三 引用の形式

新約聖書における旧約聖書引用が、そのままの形の機械的引きうつしに終ることがないことは言うまでもない。引用形式の類型は、引用の定式と技法によって定められるところが大きい。「……と言っている」「……と書いてある」という形で導入される、比較的単純な字義的引用に始まり、複数の箇所をつなげる複合引用、特定の文書、著者、物語への言及等、その形は多岐にわたっている。いずれの場合にも、引用は、たんに証拠聖句を引いてくることが、あるいはそれらを総集することには終らず、単純と見える場合であっても、引用がなされる場面には、新約

聖書記者の解釈がこめられている。旧約聖書のある箇所、ひいては、旧約聖書全体の見直しについての新約聖書記者の態度が、そこには映し出されている。

原始キリスト教会は、自分の経験と理解に即して、ということとは、主として、イエス・キリストご自身の旧約解釈とその適用に範をとって、旧約章句に終末的解釈を施し、それをキリスト論的に適用したのである。ペシエルと呼ばれるのは、このような、イエスにおける旧約聖書全体の成就を主眼とする解釈である。時として、引用部分の文章が、ヘブル語旧約聖書原文あるいは七十人訳と比べて、多少変えられているのは、創造的な意図的改変と見るべきであり、そこには明らかに、引用する人の解釈が含みこまれている。すなわち、引用は多くの場合、解釈こみの引用となっているのである。

導入の定式は、この解釈と現実への適用という面を含みつつ、なおも、旧約聖書の神的權威を強調してやまない。「聖書はなんと言っているか」(ガラテヤ四・三〇)、あるいは頻出する「……と書いてあるとおりである」との表現は、明らかに、引用者の側の終末的理解を含みつつ、いま、ここに現実となった福音の出来事の神的起源を鋭く浮き彫りにする役割りを果たしている。特に、マタイ福音書に特徴的な、「……と言われたことが成就するためである」(一・二三、二・一五、二三、四・一四他)との定式、さらに、「言われたことが成就した」(二・一七)との宣言は、預言とその成就という、救済史における神の行為のダイナミクスをあますところなく表現している。時刻表のとおり電車到着したというようにレベルをはるかに超えた神の歴史支配、すなわち歴史に働く神の恵みの力の働きを立体的にあかす手法である。ルカについて言えば、「それは、聖書に示されたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ」(ルカ二二・二二)との言明が、世の終りにおける神の宇宙的審判の姿を総括的かつ躍動的に表現している。

この全体的な背景から、われわれのテキストを見れば、引用を導き入れる二五節に、すでに原始教会の解釈がこめられていることがわかってくる。引用されている詩篇第二篇は、第一篇とセットにされて、ユダヤ人によって、伝統的にダビデの作と信じられていた。しかし、ここでは、「ダビデは言った」とは書かれず、神が、その僕ダビデの口をとおして、聖霊によって言われた、と告白される。同じような例が、行伝一・一六にすでに見えている——「……ユダについては、聖霊がダビデの口をとおして預言したその言葉は、成就しなければならなかった」。ダビデの他にも、モーセ、イザヤ、ホセアなど、人間の著者をもちろん認めながらも、究極の著者は神であるとする教会の理解と信仰が、新約における旧約引用に明白に結晶している。旧約聖書の靈感は、原始教会によって、このように把握されていた。同じ行伝の中に、「ダビデは、イエスについてこう言っている」(二・二五)、「彼」(ダビデ)は預言者であって、……と語ったのである」(二・三二)との表現に並んで、神あるいは聖霊を主語とする表現が用いられているのは、われわれの関心を惹くところである。ダビデの歌った詩篇一六・一〇を引用して、「神が、こう言っておられるとパウロが語るのも、同様の例であるし」(一三・三五)、聖霊は預言者イザヤによって語ったとパウロがあかすのも、同じ線に沿ってのことである(二八・二五)。

テキストの二五節は、諸家が指摘するように、その読みが異なり、本文に崩れがあるとされるが、ここでは、テキスト上の細かい議論にまで立ち入ることを避け、伝統的な翻訳に従うこととする。あなたが、聖霊によって、あなたの僕ダビデの口をとおして、こう仰せになった、との告白は、「天と地と海と、その中のすべてのものとの造り主なる主」に向けられている。絶対的な權威を持つ主(デスポテース)は、全能の創造者であるばかりでなく、歴史の主におられ、特に、救いのわざにおいてその大能をあらわす主であられる。ペテロは後に、苦難の中にあるキリスト者に宛てて、「……真実であられる創造者に、自分のたましいをゆだねるがよい」と、励ましの言葉を書き送っている

主は、救いを約束し、それを実現に到らせる全能の主にいます。人のあらゆる反抗にもかかわらず、むしろ、その反抗をさえ、み手のうちに統御して、主は救いの計画をなし遂げられる。もろもろの敵は主が定められた以上の力を持つことはない。預言とその成就、み旨とその実現という、この明確なスキームに奉仕すべく、詩篇二・一―二の引用は、神が語られたという形式をとっている。旧約聖書と新約聖書の関係は、ひとことでは言え、この成就において結ばれる。旧約の証言の確かさは、神がこれを語り出されたことにある、と教会は告白したのであり、成就の事実の上に、二重の確かさを見たのであった。ルカが、福音書Ⅱ行伝を貫いて展開したのは、この意味における「神のみ旨の神学」、すなわち、み旨の成就の神学であった。

四 詩篇第二篇のキリスト論的解釈

与えられたテキストの釈義に即して、詩篇第二篇の原始教会による解釈を跡づけることを試みよう。先に見たように、初代のキリスト信者は、詩篇二・一―二を、神によって油そそがれた聖なる僕(Ⅱ子)イエスを預言するとともに、苦難のうちにある教会自身の状況を預言するものとして捉えている。初代の信者は、メシヤの苦難と、選びの民の苦難とを、同一の種類のものではないにしても、ひとつに結んで理解していたと結論することができる。

(1) 反逆の連続性

ペテロを初めとする原始教団が、イエスに教えられ、促されて、詩篇第二篇を終末的に解釈した結果は、いま、自分たちに加えられている脅迫を、メシヤ・イエスに加えられた反逆に重ね合わせ、その詩をメシヤのみならずメシヤの民にもかかわるものとして、コーポレートな意味で理解したことに、もっともよくあらわれている。詩篇の預言では、もろもろの国びと、もろもろの民、地のもろもろの王、もろもろのつかさが、主とその油そそがれた者とに逆らうことが告げられている。その成就として(二七節の「まことに」、ならびに二八節の「なし遂げた」に注意)、神から油を注がれた聖なる僕イエスは、ヘロデ、ピラト、異邦人、イスラエルの民の反逆を受けることとなる。この場合、ヘロデが「王」を受け、ピラトが「つかさ」を受けて、「異邦人」、「イスラエルの民」とともに、詩篇の預言との整合を図っていることは言うまでもない。

しかし、ここで注目すべきことは、反逆者たちの一致団結の姿である。詩篇の預言では、「党を組んで」(特に、慣用句「エピトアウト」に注意)が、支配者たちに限定されているのに対して(二六節)、教会の解釈によれば、ヘロデとピラトの両者が異邦人およびイスラエルの民と「一緒になって集まった」ことが強調され、四者の共通した利害と意図とが明白にされる(二七節)。この連続線上に、いま、使徒たちに加えられている「彼ら」の脅迫(二九節)を注意深く読みとるべきであろう。彼らとは、言うまでもなく、議會を構成する面々であり、主イエスと、主の教会とに敵する勢力の総体である。反逆は世界的であるとともに、いわば整備された一貫性と連続性を持っていた。

この一連の叙述からしても、メシヤの苦難にあずかるメシヤの民の苦難の必然を初代教会が意識していたことは疑うべくもない。この意識に基づいて、教会は群れとしての祈りに徹する。脅迫を加える「彼ら」に対して、「あなたのしもべたち」である教会は、敢然と立ち向かう決意を表明し、その力を神に求める(二九節)。宣教は苦難なしには推進されないことを教会は十分に承知していたからである。

詩篇第二篇に歌いあげられているメシヤの世界的支配という雄大なテーマが、イエス・キリストにおいて成就したとする把握は、新約聖書記者が随所に明らかにするところである。われわれのテキストで中心的なポイントは、主とそのキリスト(油そそがれた者)への逆らいであり、その意味では、詩篇第二篇の最初の二節の預言がイエスにおいて成就したことが、教会の告白の主要部分を成している。

しかし、すこしばかり注意して読むならば、このテキストは、詩篇二・一〇二のみならず、第二篇の全体にわたって目をくばり、メシヤの性格と職務の本質に触れていることに気がつく。詩篇二・七で、「おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえを生んだ」と言われるところは、すぐれてメシヤ的な表現として、行伝一三・三三、ヘブル一・五、五・五に引用されている。われわれのテキストには、この節の直接の引用はないが、引用されている二・二の「そのキリスト」の栄光と權威は、二・七の描き切る、父との独自の関係および父の与える特別な職務によって裏書きされている。

初代教会は、その祈りの中で、「主のキリスト」(二六節)と、「聖なる僕イエス」(二七、三〇節)とを並置し、そのことよって、メシヤ・イエスの本質にもう一步迫ろうとしている。イスラエルの王の即位を歌うのが、この第二篇であるが、イスラエルの真の王たる「主のキリスト」は、ユダヤ人の信仰においては、つねに、第二サムエル七・一二―一四に預言された「わたしの子」と結ばれていた。それは、詩篇二・七の「わたしの子」によってつながれていることである。初代教会は、神の子、王なる子の栄光をメシヤ・イエスにおいて見たのみならず、そのイエスにおいて、苦難の僕の本質を見てとったのであった。新改訳聖書が正しく訳出するように、この僕は、「あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべ」(二七節)である。三〇節も同様に、「あなたの聖なるしもべ」と訳される。王なる

神の子が、同時に神のしもべであることの秘密は、すでにイエスご自身が弟子たちに親しく教えておられたことであつた。イザヤ書五三章の主の僕の歌をイエスがご自身にあてはめて、代理贖罪の福音の核心を宣言されたことを、ルカが注意深く記すとおりである——「あなたがたに言うが、『彼は罪人のひとりに数えられた』としるしてあることは、わたしの身に成しとげられねばならない。そうだ、わたしに係わることは成就している」(ルカ二二・三七)。

イエスを神の僕と呼ぶことは、すでに、行伝三・一三、二六に見えているが(その僕)、四・二七では、「あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエス」と、その内容に一段の豊富さが見られる。「油を注がれた」は、詩篇二・二の「キリスト」と対応する。神によって油そそがれたものが苦しむべきことは、神が全預言者の口をおして予告され、成就されたことである、とペテロが説教しているように(行伝三・一八)、メシヤの受難の必然性は、メシヤ概念を構成する不可欠の要素を成している。油そそぎは、職務への任命を印証するものであるが、そこには、注ぐ者と注がれる者の間にある親密な関係が示されるとともに、神の霊の付与という、実質的な恵みがともなう。

次に、「聖なる僕イエス」と呼ばれているが、ここでルカは、三・一三の「その僕イエス」と、三・一四の「聖なる正しい方」を織り合わせて、詩篇二・一〇二についての初代教会の解釈をわれわれに示しているように見える。

「僕」と訳されているギリシヤ語「パイス」は、子を意味する。しかし、それは、特別な意味で寵愛される子を指し、特に、キリストが神のパイスと呼ばれる時には、旧約聖書の背景から、独自の「僕」と理解される。それは、イザヤ五二・一三に基づくところが大きく、この章句の七十人訳と行伝三・一三との間には著しい対応が見られる——「ホ、パイス、ムー、ドクサスセーセタイ」に対して、「エドクサセン、トン、パイダ、アウトゥー」。僕は奴隷ではない。最愛の子として、最大の信任を受けて、託された任務を全うするのが僕である。全うしたがゆえに復活の栄光を与えられたのである。この僕モチーフに、苦難の概念が結び付けられていることは、すでに、イエスの宣言におい

て見た（イザヤ五三・一二→ルカ二二・三七）。行伝八章に記される、ピリポの宣べ伝えた「イエスのこと」にも同様の強調が見られる。パイスは、もっぱら果たすべき職務の面から、父に対するあり方の基本を示している。すなわち、神のみこころへの従順であり、これは、奴隷としての従属とは異なる積極的な意味を持っている。初代のクリスチャンたちは、イエスにおいて、ダビデに表象される栄光とイザヤの描く謙卑の両方のニュアンスをたしかに読みとっていた。

ふたたび「油を注がれた」に戻って考えるならば、油を注がれた僕を果たすべき職務はあまりにも明白である。イザヤ六一・一以下に明らかとなっており、主の油そそぎは、貧しい者への福音の宣教、いやし、放免と解放の告知、神の恵みときばきの告知、慰めと喜びとさんびへの招きという、広範な職務への任命であり、これはすべて僕イエスによって、地上のミニストリーにおいてなしとげられた。そればかりではなく、僕イエスは、復活の主として、ご自身の教会の宣教といやしのわざにおいて、この職務を実行される。教会が、「……聖なる僕イエスの名によって、しるしと奇跡を行わせて下さい」と祈ったのは、この理解と信仰によることであった（三〇節）。

パイスの用法とその意味するところについては、さらに、イエスのパペテスマにおける天からの声にある「わたしの愛する子」（ルカ三・二二）、およびイエスの変貌における雲の中からの声にある「わたしの子、わたしの選んだ者」（ルカ九・三五）との関連で、詩篇二一・七とイザヤ四二・一の結合に注目し、そこで用いられている「子」（フィオス）の用法と意味との類比に目を配ることが必要であろう。詳細については、ここでは省いておく。

五 釈義から説教へ

以上の釈義と考察とから、説教のための黙想へと進みたい。

第一に、主の教会にとって、福音宣教にさいして受ける脅迫は、形こそ違え、いつの時代にも必然である。メシヤ・イエスへの逆らいは、メシヤの民である教会への逆らいでもある。

第二に、しかしながら神は、主権と大能の主として、事態をみ手のうちに握っておられる。この主の僕（＝奴隷）として、教会は、「主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめてください」と祈り、自分の存在と宣教のあかしのいっさいを神のみ手にゆだね、復活のイエスの名、すなわちイエスの力に全信頼を置く。原文に即して言えば、われわれは、あなたの奴隷であり、あなたの言葉を語るわざに召されている。

第三に、教会の告白は、つねに状況のただ中からなされ、教会の信仰は、この状況の中でときすまされて行く。苦難の中で、この告白と信仰とをもって祈る教会には、祈りにこたえたもう神がいます。われわれの置かれている状況をごらんになっている神がいますとの確信こそ、底知れぬ平安の源である。脅迫から救い出されること、あるいは脅迫が絶滅されることを使徒たちは祈らなかつた。それは、脅迫の中でお、聖霊による勝利が与えられることを信じたからである。そして神はその勝利をあざやかに与えたもうた。

以上は、黙想の主要点であって、必ずしも説教の区分を示すものではない。紙数の関係上、説教のアウトラインを記すには到り得ないが、研究の中で論証を試みた聖書の成就のモチーフが明確に打ち出される説教をめざしたい。聖書の成就とは、言うまでもなく、神のみ旨の成就であり、終末の完成をさして、救いの歴史はいまも展開されている。

この歴史の中で、教会の宣教が用いられていることを強調するとともに、困難な戦いを戦い抜き、「大きな患難を

とおって来た人たち」(黙示録七・一四)にのみ、勝利の白い衣が用意されている、との終末の希望に生きること
強く促す説教を組み立てた。

〔註記〕 釈義ノートは性質上、注はらうと省略した。注解書以外の主要参考文献は次のとおりである。

- I. H. Marshall, *Luke: Historian and Theologian*, 1974.
- R. N. Longenecker, *The Christology of Early Jewish Christianity*, 1970.
- R. N. Longenecker, *Biblical Exegesis in the Apostolic Period*, 1975.
- J. W. Wenham, *Christ and the Bible*, 1972.
- R. T. France, *Jesus and the Old Testament*, 1971.

(四国学院大学教授・日本基督教改革派普通寺教会協力牧師)